

コンチキツアーとは？

☆コンチキツアーは、18歳から35歳までの若者を対象にした国際的なバスツアー。参加者は世界中から集まる旅好きばかり。

☆国際色豊かな旅だから、観光地での説明、ツアー参加者との会話などすべての共通語は英語。英語を勉強したい、もっと自分の英語を磨きたいと思ってる人には絶好のチャンス！

「コンチキツアー☆シンプルイタリー12日間」参加者 岐阜大生 Sさんの日記より



1日目…3/21【ローマ】

飛行機の高度が下がり、フィウミチーノ空港に近づく。S字に蛇行する川と、綺麗に整列した家はまるで御伽噺のミニチュアのように、初めて降り立つイタリアに胸が高鳴った。が、空港からテルミニ駅までは遠く、切符を買うのも英語が通じなくて苦労した。自動販売機も全部故障中。重いトラップを抱えて何とか昼に集合ホテルに着いた。時間があつたので近くの市場を回る。

ホテルに戻ると部屋がきめられており、ルームメイトのミシェルが待っていた。優しくてきちんとした人で安心した。簡単な話をしながら、シャワーを使う時間（私は夜、ミシェルは朝）などを決めた。夕食前の顔合わせでは、人種の多様さに驚いた。メンバー35人のほとんどがネイティブだった。夕食では、私は友人と参加していたけれど、いろんな人とコミュニケーションを取りたいので、とお互い言っていたので、別々になって英語でがんばって話す。ちょっと疲れたけれど、旅行の期待が膨らむ1日目だった。

2日目…3/22【ローマ→サンジミニャーノ→キャンティ→フィレンツェ】

サンジミニャーノの城壁へくぐると、瞬時に中世へタイムスリップできる。すべてが柔らかな赤茶色のレンガでできているかのような小ぢんまりした町は、そのままロマンチックな絵本の舞台だった。タイ出身でイギリス留学しているKoon（妹のKate、妹の彼氏Noteと来ていた）と一緒に歩き回る。高台からの眺めは最高だった。

再びコーチに揺られ、着いた先はキャンティのワイナリー。ワインテイスティングは予想以上に豪華で、日当たりのいいテラスのテーブルにグラスが並べられ、赤と濃い金色のこっくりしたワイン、甘いフルーツワイン、それに浸して頂くビスコッティや焼ききたてのパン、チーズなどがありとても豪華だった。思ったことがなかなかすぐに表現できないけれど、雰囲気はとても良かった。外国の人は、こういう軽いパーティーに慣れているのだろうか？ワイン造りの倉も見学できた。

次の移動ではカリフォルニアから来たというBeckyと話した。小学校の先生らしく、ゆっくり丁寧話してくれる。うとうとしながらフィレンツェに到着した。暮れなずむフィレンツェに浮かび上がるダビデ像や荘厳な教会、兩岸をレンガ造りの建物に囲まれ、きらきらと街灯を反射するArno河にはたけ息が漏れた。

3日目…3/23【フィレンツェ】

革・金細工の工房を見学し、見事なイタリアなまりの英語で説明を受ける。Beckyに通訳してもらいながら聞いた。集合写真と昨日のレプリカ・ダビデ像の前で撮ってから自由行動となったので、日本から一緒にの友人といかにも観光旅行！というプランで街を巡る。オレンジの屋根が美しいフィレンツェの街並みはお花畑を連想させ、建築のダイナミックさはもちろん、微に入り細をうがう装飾まで、すべてに感動が止まらなかった。

夜はオプションのレストランへ。香港系アメリカ人のWincy、日本の4人、タイ出身の3人で‘Asian table’となり、打ち解けた雰囲気良く食事も美味しかった。その後は希望者10人のみディスコへ。煙った空気の中ライトが乱れ飛んで、誰彼構わず踊っている人たち。最初は危うい雰囲気にしり込みしたけれど、アメリカから来たというキャピキャピした女の子、Kate、Leahが誘ってくれて、ダンスフロアに出て1度踊ってみたら、本当に楽しかった。日本のMayuにもダンスを教えてもらい仲良くなった。

しかし帰り道は悪夢。KateとLeahと3人でタクシーに乗ろうとしたものの、2人はひどく酔っていて、高いからばったりだと叫んでタクシーを降りるし、道に迷ってヒッチハイクまがいのことをしだすで大変だった。ディスコに戻って中国系イタリア人の男の子達に助けられ、ホテルに着いた。

4日目…3/24【フィレンツェ】

フィレンツェと名残を惜しみ、ピサに到着した。あまりに有名なので期待していなかったけれど、いきなり目に飛び込んできた巨大な礼拝堂とドゥオーモは、斜塔と引き立てあって荘厳さを増していて、圧倒された。1時間しか自由時間がなくて、塔を支えたりキックしたりのお決まりの写真をみんなで撮った。

ここからコモ湖へは渋滞でひどく混んだ。疲れて寝ている間にミラノに来ていたようで、到着の時は思わず運転手のFerraroに拍手が出る。ガイドのサヴィーナが言うには、このメンバーはのりが良いらしい。別荘地らしい綺麗なホテルで、広いホール風のエントランスにはピアノが置いてある。遅い夕食後に忘れられない体験をした。

Koonがピアノを弾いていろいろと教えてくれたので、メンバーの夫婦とKoonの前だけでひっそりと弾いていたのが、いつの間にか20人くらいの人が集まり、真剣に耳を傾け、心から感心してくれていた。緊張と喜びが混ざって不思議な感覚だった。サヴィーナが、ホテルの人も驚いていると教えてくれ、その支配人さんはワインのボトルをあけて、その場にいた人にもふるまってくれた。自分の弾くピアノで感動を分かち合えて、とても幸せな空間だった。



5日目…3/25【コモ湖→ヴェローナ→ヴェネチア】

目覚めるとコモ湖は真っ白な霧に覆われ、そして寒かった。朝食のあとのクルーズは展望が良くないものの風がひやりとして湿っぽく、心地よかった。途中で1時間ほど町を散策。こちゃこちゃとしてどの路地裏も繋がっているような、愛らしい町だった。ヴェローナには1時間、滞在というより立ち寄った感じだった。ロミオとジュリエットの家を見学し、汚さに驚き、少し市場を歩いたらすぐに集合となった。

ヴェネチアまで長時間コーチに揺られる。大きなホテルだけれど、郊外で周りに何もないので、廊下を挟んで同じフロアにメンバーがいるので、部屋をのぞきまわったり、買い物の成果を披露しあったりで退屈しなかった。

6日目…3/26【ヴェネチア】

朝もホテルでのんびり過ごす時間があつたので、ミシェルと長く話した。こういう時、コンチキっていいなと強く思う。フェリーでヴェネチアに向かうと、海のぎりぎりに立ち並ぶ建物に迎えられ、昔から多くの人がこのアドリア海の女王に魅せられたことを実感した。

サンマルコ広場に到着するまでいくつも橋を越えて、濃緑の水が揺蕩うのを見た。寺院は今までのドゥオーモと違い、丸屋根が異国風で、広場全体が均整の取れた美しい庭に見えた。ガラス工房、レース工房を見学した。日本の子3人とCelia、Julietta、Heidyとサンマルコ寺院に入るため行列を作り、一緒に鐘楼にも上った。Celiaはオーストラリアで日本人の友達がいたらしく、片言で日本語のしゃれを言って、他にもいろいろ教えて欲しがり、面白くて笑い疲れるくらいだった。赤い屋根の広がる眺めはとてもよかった。あんなにたくさんある水路は見えないけれど、この下に隠れてひっそりと息づく、ヴェネチアの血脈のように思われた。

7日目…3/27【ヴェネチア→ウルビーノ→アッシジ】

朝から雨にたたられ、観光時間もほとんどない1日だった。雨の中を、ラファエロやミケランジェロの生まれたウルビーノへ。赤茶けたレンガの町で自由時間は45分しかなく、大急ぎでパノラマ通りへ向かう。途中、諦めて引き返してきたらしいSebとRozel（このとき妊娠5ヶ月だった。カナダ人の夫婦。）に時間がないし遠いよと言われたが、駆け足で坂を上り続けると、すばらしい眺望が広がった。諦めなくてよかった。

コーチではCeliaと隣になり、トラップの手品や古今東西の英語版を教えあつて、とても楽しかった。Celia's English schoolを開校して発音のダメ出しをしてもらったり、移動があつたという間だった。次のアッシジ観光も急ぎ足で過ぎてしまった。敬虔な宗教の地らしく、目を潤ませて十字を切る人がたくさんいた。地下の墓は重たく、9世紀当時のままのものなどがあり、少し怖かった。今日のホテルもピアノがあり、居酒屋さんのようで、コンチキ以外の人もいる中で演奏した。仲良くなったCeliaとピアノや好きな時代、作曲家について詳しく話せて、嬉しかった。

8日目…3/28【移動日】

旅は続く・・・

